

〔国際会議開催〕

申請者	東京大学 大学院情報理工学系研究科 准教授 大黒 達也	2255008
国際会議名	International Symposium on Language Processing Across Cultures	
会議ホームページ URL	https://www.ai.u-tokyo.ac.jp/ja/activities/3438	
開催期間	2026 年 1 月 14 日～2026 年 1 月 14 日	
会場名称	福武ホール	
会場住所	東京都文京区本郷 7-3-1	
開催形式	ハイブリッド形式	
申請者の役割	実行委員長	

〔国際会議の概要〕

本国際会議「International Symposium on Language Processing Across Cultures」は、2026 年 1 月 14 日に東京大学本郷キャンパス福武ホールにおいて開催された。本会議は、言語処理を文化横断的な視点から捉えることを目的とし、言語学、神経科学、認知科学、音楽認知科学、人工知能研究など、複数分野にまたがる国内外の研究者が参加する学際的国際会議として企画・実施された。開催形式は現地参加とオンライン参加を組み合わせたハイブリッド形式であり、地理的制約を越えた活発な国際交流の場となった。会議では、人間が言語を獲得・処理する際に用いる時間構造やリズム構造に焦点を当て、それらが文化間でどの程度普遍的であり、どのような点で文化固有の多様性を示すのかについて、多角的な議論が行われた。各発表では、発話運動、統計学習、音声知覚、神経同期、音楽との構造的対応関係といったテーマが取り上げられ、言語を単なる記号体系としてではなく、身体性と時間構造に根ざした知的活動として捉える視点が共有された。申請者は実行委員長として、会議全体の構想立案、海外講演者の招聘、プログラム構成、当日の運営を統括するとともに、自身も講演者として登壇した。

〔開催の目的・意義と得られた成果・効果〕

本国際会議の開催目的は、言語処理の基盤にある時間的・階層的構造を軸として、言語と音楽の関係性を文化横断的に理解し、人間の知能に内在する普遍的原理と文化的多様性の両立を明らかにする点にあった。本会議の意義は、従来は個別に議論されがちであった言語研究、音楽研究、神経科学的研究を横断的に結びつけ、共通の理論的基盤の上で統合的に議論する場を提供した点にある。各発表者の講演では、言語と音楽の時間構造に関する多様なアプローチが提示された。ある発表では、発話や音楽におけるリズム知覚と神経同期の関係が神経生理学的データに基づいて示され、人間の脳が複数の時間スケールを同時に処理していることが強調された。また別の発表では、文化や言語の違いが音声リズムや韻律構造にどのような差異をもたらすのかが実証的に示され、文化固有の音声特性が学習や理解に与える影響について議論が行われた。申請者の発表では、乳児向け発話と音楽の比較研究を中心に、言語と音楽が共通の階層的時間構造を有していること、特に 1～3 Hz 帯域のリズムがコミュニケーションや学習において重要な役割を果たすことを示した。さらに、日本語のモーラ拍リズムに代表される文化固有の音韻構造が、普遍的な時間階層構造の上に柔軟に実装されている点を示し、言語と音楽の関係を文化横断的に理解するための理論的枠組みを提示した。さらに、人工知能研究の立場からは、人間に限られた経験から効率的に言語を学習する仕組みを、計算論的モデルとしてどのように実装し得るかという問題提

起がなされ、人間知能の理解と AI 設計を結びつける視点が共有された。

これらの講演を踏まえて実施されたパネルディスカッションでは、登壇者全員が参加し、約 1 時間にわたり極めて活発な議論が展開された。議論では、言語と音楽の関係を「進化的起源」「発達過程」「神経基盤」「文化的多様性」という複数の観点から再整理する試みがなされ、フロアからの質問も交えながら、双方向的な意見交換が行われた。特に、普遍的な時間構造と文化固有の音声・音楽特性をどのように理論的に統合するかという点については、多様な立場から意見が提示され、本会議の中心的テーマを深く掘り下げる議論となった。この長時間にわたるパネルディスカッションは、本国際会議が単なる研究成果の発表の場にとどまらず、新たな研究課題を共同で構想する創発的な場であったことを象徴するものである。

得られた成果として、国際的な共同研究へと発展する具体的な動きが生まれた点が挙げられる。会議中およびその後の議論を通じて、複数の海外講演者との間で研究テーマの接点が明確化され、継続的な共同研究の可能性が確認された。その成果として、申請者は本年 6 月に講演者の所属機関を訪問し、現地での講演および研究討議を行い、さらなる議論を深める予定である。

また、本会議を通じて、言語や音楽の文化的多様性を尊重することの重要性が、参加者間で広く共有された。特定の文化や言語を基準とするのではなく、多様な文化的実践を比較することでこそ、人間の認知機構に共通する原理がより鮮明になるという認識が深まった点は、本会議の重要な成果である。この知見は、基礎研究にとどまらず、教育、発達支援、多文化共生社会の設計、さらには文化多様性を前提とした人工知能開発へと応用可能な視座を提供するものである。



パネルディスカッションの様子